

《技術報告》

¹¹¹In-ペンテトレオチド (MP-1727) 第 III 相追加臨床試験
ソマトスタチン受容体の存在を指標とする消化管ホルモン産生腫瘍の画像診断

佐賀 恒夫 ¹	玉木 長良 ³	井樋 慶一 ⁴	山崎 哲郎 ⁵
遠藤 啓吾 ^{6,*}	渡邊 五朗 ⁷	丸野 廣大 ⁸	町並 陸生 ⁹
小泉 潔 ^{10,***}	市川 太郎 ^{11,***}	高見 博 ¹²	石橋みゆき ¹³
久保 敦司 ¹⁴	日下部きよ子 ¹⁵	平田結喜緒 ¹⁶	村田 雄二 ¹⁷
宮地 幸隆 ¹⁸	津布久雅彦 ¹⁹	阪原 晴海 ^{20,**}	片田 和廣 ²¹
利波 紀久 ²²	山本 和高 ^{23,***}	小西 淳二 ¹	今村 正之 ²
土井隆一郎 ²	島津 章 ^{24,***}	野口眞三郎 ^{25,***}	長谷川義尚 ²⁶
石川 治 ²⁷	渡邊 祐司 ²⁸	中條 政敬 ²⁹	

要旨 消化管ホルモン産生腫瘍が疑われる 40 例 (既存の画像検査で病変が確認されている A 群: 18 例, ホルモン値が高値であるが責任病変が確認されていない B 群: 22 例) を対象に, インジウム-111 標識ペンテトレオチドを用いたソマトスタチン受容体シンチグラフィの有効性, 安全性および有用性を評価するため, 多施設共同臨床試験を実施した. 有効性評価対象 35 例中, 酢酸オクトレオチド負荷試験実施症例において A 群で 12/16 例 (75%), B 群で 11/19 例 (57.9%) が有効と判定された. 組織診断実施症例では A 群 5/9 例 (55.6%), B 群 2/4 例 (50.0%) が有効と判定された. 安全性の検討では, 重篤な有害事象は認められなかった. 臨床的有用性について, A 群で 11/16 例 (68.8%), B 群で 5/19 例 (26.3%) で「有用」と判定された. 以上より, 消化管ホルモン産生腫瘍の診断および治療方針の決定において, 本シンチグラフィが臨床上有用な情報を提供しうることが示唆された.

(核医学 40: 185-203, 2003)